KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

ル4
1380

高橋蔵書
福田蔵書
1.380

大丸かるを
精翁埒画

みてゝも
たるへし
ぬたれ
孫九
よみ
ゐくひ
ゐく
ゐかき
ふたろは
もとを

八日記自序

五月れもちれひふいれくふれゑがゑ
れゑほヱれゑゑれ業明翁を空めらひは
ゑれは翁れいへらくわれはもやゑかく
かゑゑきめゑれ祢ふめゑひれほヱゑ
むかゑれもほゆ岩雲花香主はもやわき
へふあをひゐて六ゑよヱめゑれやまふ
いゆきかへを祢空めゑれ祢れ祢もゑろ

ふいへるまふまゐて六月れもちれひ
れあさ翁れ家れける利貞空其家形る只
年空袖れれて内きかひせゑ間れゑ空を
もうゑをも雪れ玉水み形からはゑかき
ゑて記れ名をはゆきかひせゑひかゆふ
て八日記空れはせ形　時は天保二空せ
空いめ空ゑれゑ六月れは形かあまヱめ形
かれひれゆめへかくいめは阿波国人

八日記

十かあまりの四かれひゐ明日は富士
れ祢ゐれほらむやれもひて
もちれよゐぬるけるゆきをよくみむや
ぬ去れるか祢ゐあ灰はれほらむ　花香
十かあまりい初かれあされ六切時
ゐ荒木ノ神社ゐまゐるまて
かみさぬるあらきれみやはあをやきれ
いやもるぬやを去あらきれみやはゝゝ

やうゐひて長崎ノ村をゆく時ハ
ゐゐむらをあさゐちいてて ぬゑれ祢を
さゑてまゑゆくゑかさきれみち、、
四ゑ時ハ三嶋ノ神社ハまゐむて
うちきゐる灰けれをかさをぬきれきて
みゑまれみやをみてきをろかむ、、
九ゑ時ハ深良ノ村ハて酒呑て
よろよろをよろきれは去をよろよろを
よろよろよろをわゐをけるかも、、

八月記

八ゑ時ハ
ぬくかせハ去らくもはれてもちれひハ
いまゐきゑさるゆきハほぬみゆ、、
もちれひハまゐきゑあへぬゆきみむを
ホもぬまハまゐかかる去らくも 利貞
七ゑ時ハぬゑれ灰きををハてをを見
ハあへを去れを見れをかほう ゑ
くゑかをけれは
ぬゑれ祢れゆきれハほひハみくらへむ

をゝゑれかほれさくらいろをは　花香
暮六ゝ時ゝ外河氏ゝやゝゑて主ゝ
酒進ゑられて呑て祢てナかあまゑ
六かれ朝ゝくゝたきていひくひて須
走ノ瀧ゝてみ井きゝて六ゝ時ゝ富士
淺間ノ宮ゝまゑて神達ゝ祢きゝゝ
まをゝて子供らゝ金ゝけちらゝて
ひろはせて五ゝ時ゝ馬反ゝゝいゑ所
れ神門前ゝてれほ井ちらゝ富士ノ山ゝ

ゝ雲をみて
れもひきやゝはゝゆきみむゝれほるひゝ
ゑゝれやまゝゝゝくも多多むゝは　、、
あゝよゝれほる人等ゝきか戻
ゝ井ゝをゝみゝゝ井きくきみゝわか
あゝみてれほれゑれ多か祢ゝ　利貞
四ゝ時ゝ只年か箱根れ水海れみゆ
ゝいへれは大ゝ
多まくゝけはゝ祢れやまれみゝうみを

みなをれをれほる如きれ多か袖ふ　花香
をうゑけて大石ふ腰かけて休て九
なる時ふ
多なるひけるくもちをわけて如きれ袖ふ
れほをてあまなるほきをみむかも　、、
如きれ袖ふくらへてみれはさをひをれ
れほせてうれるもれやや頃けむ　、、
八なる時ふ頃なるなるひく雲をみ
て

頃なるなるひくくもれまをるきを
ぬきをかなるみるぬきれやまふて　、、
七なる時ふ酒香をれはせる人れ雪
はちちちちを調もれもきるきをい
ひなるれほをて暮六なる時ふ岩室ふ
宿をて味酒香て袖て十かあまをを
ぬかれ朝をくれきて
くもれうへれひをふきはきはふ多るかも
ぬきれ袖るふてうゑよむわれは、、

ぬぬぬぬぬれは袖もやぬれぬぬぬぬれ袖ふ
袖てれあさけれかせぬをみふぬむ　、、
わかむ袖ふあさひかけさぬぬぬれ袖ふ
い袖てれくれはあさひかけさぬ　、、
あか袖さぬぬよさかれほるひれかみれ
みかけぬぬぬれやまふかかやく　、、
ぬはさ袖ぬぬよさかれほるひれかみふ
みきるてまぬるぬぬれ袖るふて　、、
やぬくふれぬぬぬぬもまるるからぬも

みえてるぬぬぬぬぬれるぬぬぬれ袖は　、、
ぬぬれ袖れぬぬまかるけふてよぬはちを
よぬぬよくみぬぬまかるけふて　、、
ぬぬれ袖れぬるきれみ袖ふあくみるて
ももやぬくふをみるぬきれよさ　、、
るぬぬくもかぬぬくもあぬみいくされ
きみもあぬきてみぬぬれ袖は　、、
よきぬぬをわれはぬるかれぬぬれ袖ふ
れほぬてくもれうへもぬぬれみれ　、、

れもぬしゝしろれままになるさはれ
さはにしゝぬるかひもみえなな、、
さきくされみなれからをもみわたりに
よきしゝろなりぬしれたかみは、、
四なり時にきぜれよやしれりし岩室
にかへりによりければまれ酒進ぜ
なな客人達れ鮎をはみさかなにせ
しゝききなぜはしれ山にてはあし
かりきしいへるにぜはしゝろえた

かへなるをもれかたりて又鮎をは
なえて酒れみてくたるさに七なり時
に柴山にて花香は木刀刹負は真刀
もてしはしはたたかへるにかちし
もまけしもなちさりしはをさまれ
るよれわさなりけるよなしもろし
もによろしひなり暮六なり時に外河
氏にかへりて
れほりにもや彼けくありてくたりにも

やゝ更けゆくあまてゝ去れるよきかも　利貞

去れよはまさしくさくさされみあへ志

けれはたむかしくもれ志てあをひ

あか志ゝ十かあまてゝ八かれひをゝ十

かまてゝ九ぬかれひをは富士淺間ノ宮

ふかへてゝまを志ふまゐてゝもれ志

ゝ廿九二夜も外河氏ふやをてゝ廿

日九四ゝ時ふ多ちく三鳴れやをてゝ

ふ暮六ゝ時ふゝきて

を空色らをみ志ま更かかさかゝ多むけて

ゝ多ゝかれをきふやをもをゝけてゝ　芹香

うゝく志きを空色かまひをみ志まふて

みるは多れ志もを空色かまひを、、

廿かあまてゝ二日九九ゝ時ふ秦明ノ翁

れ菴ふかへてゝゝきぬ時ふ翁れ富士ノ

山れ雲れ雪れ志をくふみゆをいへ

れは

ゝほゆきれゝもてふけてゝ空形ゝ形から

みゆきやゆゑ去れやまれ去らくも、、、

低(スヘナ)謌(クタノカス)数(ミ)三十一(ワチアマリヒトツ)中(カノハ)二十八(ハタチニリヤツバ)

花香(ハナカ)ノ十リ　三(ミツ)ハ　利(トシ)負(サタ)ノ十リ

八日記

岩雲花香大人ハ富士山ハほとてく為ほて國ハかへるさハわきへハ為ちよほまを去ハ八日記をみせまゝをよくみるハいやたもをろかほけれハ櫻木ハい為ハ為らせてゝほまきハ去ていま為富士峯ハほらさる人等ハみせまほ去やまを去けれハおれよろ去やう為ハきませほてもれ去ハ去をよくみる人てハ居為からハ為ハ孫ハれほれほを去ハ去ちも去ハせ免やいゆハ尾張國人片野善長

岩雲大人著述書目

詞花かひ合鏡　折本二枚　出来

八日記　全一冊　出来

花能鏡　全三冊　近刻

花能山踏　全二十巻　嗣刻

古事記傳　附三大考目録類字　四十八冊　薄用摺　十五冊

本文古事記は綏靖三巻ゆて上巻は天地の初發より鵜草葺不合命の御代ゆ至る所謂神代の事と記し神武天皇より推古天應神天皇まで中巻にし下巻は仁德天皇より太ゆ皇ゆ至りて止る以上神代及三十四代の御記なり太四十三代元明天皇ゆ和銅五年太の朝臣安万侶ゆ奉ゆ天武天皇神に授りて稗田阿礼といふ者常ゆ誦熟たゆ勅語の奮辞のゆを撰録しゆたまひをれむとおれゆ尊き國史なり皇國に生出たらむ人のかきり先いやきゆ拜見して純實の古傳と窺知て皇國の世界ゆ國よ勝て吾國は君より餘國は奴たる支由と心得神と貴み上を敬ひ其身の皇國ゆ生たる幸を喜べき支なりきど此記は辞ふゆく越今と大異れを既より讀によみ難く味ふにわちてひ易からに遠古事記の釋同釋注れどり小書名元々集ゆ引きもれど今はれべくもいらば日本書紀は末書多けれで此の記ゆ及がきれむとそゆに世々の先達儒佛の見解ゆて取あつつもきたるのみる

れを患ひ知りて高く志を立て古人の
エ夫成就し名を世に大著述ふ普く古記に
ふべき考を傳たるも辨じ載て普通の注解と
古傳をたしろ名ら書なる易詩書春秋等に傳ふ
らを彼の漢書なる易詩書春秋等に傳ふ
小や上代大簡なる本文を紀に後世小傳る
○六國史の首小本書とらして聖德太子の撰
倉事紀りの其二書と此古事記小傳かれ
たる支此書一の巻ふ論日本紀ふ先巻首古記典等は總論に
いもまけるやうハ日本紀修撰の頃ハ古記あまけむと知れあり
國ふ國史と置て言事を記さしむとあをバ朝廷ふそこ
れよりさきふ既く史の數多しさて推古天皇二十八年聖德太
きをバ日本紀修撰の一書と以ふも子蘇我馬子大臣やと
百ハ十部弁民等本記天武天皇十年小是今の世小島皇子等十

古一

二人小かせて帝紀及上古諸事を記定しめ給ふと
日本紀にハ二つとも世小傳そらはしに
元明天皇和銅四年九月十八日太朝臣安万侶小詔おか
せて此古事記を撰録しめたまひ同五年正月廿八日功
終て貢進と本書の序文小見ゆ日本紀ハ同天皇ハ養老
四年小成より續日本紀に記されで此記より八
年おくれさて此古事記ハ字の文ちかざらびちそ
ら古語とひ孫とし古の實れあてさまを先とし勤た
るふそのおろより漢學さうに行くれて何事もかな
たのさのミうらやおのみ日本紀ハ漢の國史小似
さをバそれと悅びこの此記のするやみろと見てハ正しき
國史のさまるらぞてとらぞうり世の人彼とのミた
ふし多用ひ此記ハ名とだかちらぬち多し。以上取捨又旧
事紀の偽書れるよ辨ぜられそりその大畧に今
世おある旧事本紀十巻聖德太子の撰うひし真の紀小
ず後の人の偽輯さ非ろものかして古事記と日本紀と
取合せ又往々古語拾遺をしも取り但し三の巻の餘
遠日命の天より降て坐時の支と五れ巻尾張連物部連

の世次と十の巻國造本紀ハ他ふ古書ありて取るる物
なるべし。以上取捨

しかう○或人古事記成て後八年を経同天皇舎人皇子
ふ日本紀を撰じ事記しめのひしハ此記あやまりの故
との疑問ふ答られる論弁古本書ふ委し○古事記よ
異本あるる支世上流布の本二部ありて一ハ偽勢度會の延佳
主の鼇頭本誤脱訓も直すべていとそろしく寛永板ハ
神文字誤脱訓も訂し一も直されにもど己がさ
しらとも加へ字も私に改りと見えて中々の支ゆ
この外ふ先生らくして得られたるが一部又延佳神
主異本どもを比校して書入ちきさふを其まう写し
たる本又京村井敬義の藏書これを寛永板ふ大ら同
じ又又尾張名古屋大須真福寺の本誤脱ハ殊ふちげ
あれ奇き異本ふて書し訓ハ更ふ古書と證として歳密ふ穿鑿
うも大字ふ訂定し本文に立ち
しこやくく傍假字を施さきたれぞよむ人此訓を誦習
文字を見覚えさて傳ハよむべき○此傳著述の
年紀ハ伴の信友主の鈴屋翁畧年譜に明和元年三十五歳

にて古事記傳の稿を始め
歳れ時上の巻の傳既ふ成ぬ
寛政の始刻成とうらも彫たさとかきそ
て傳成又と同年と同十年六十九歳ふして下巻ハ傳成辛
後文政五年に至て全部刻成云
此書を古説を解し古意とさとさたろハとふて
そべていさうのとくしくつまびらかにあげ
つろひて古學の趣まく後れ世の辞れさまでてきま
へおうれたる書ハ書紀をはじ先とろの古書ハ
さらふもいとをず又後ハ哥書物語書を見るにもワきま
ふ巻きを支おほけをばかへをよみ心得おくべき書な
ろよし附巻目録凡例の末ふ子息春庭主記し置れしより

一巻 古記典等捻論 一一 書紀の論ひ 舊事紀とふ書の論
記題号の事 廿九丁オ 諸本又注釈ハ事 廿三丁オ 文體の事 卅一丁オ
假字の事 廿九丁オ 訓法の事 卅四丁オ
直毘霊 七十二丁オモテ 九十八丁ウラ 一巻終

此書ハ道といとれ論ありと注してそが神道の本意と本
文ふ述自注せられなる古人ふ教の明年にて當時より後

まで識家ふおいて議論ふ〳〵ざまどそハ皆取ふたに〳〵ぬ泥
竟にて此書ハしも学者必闇記して常ふ口熟後世ど教導
向専要の文章なり

二巻　安万侶奏上の序文と載てくもしく解る次ふ系図 二十五丁オ 古事記の
きりの神人の系譜ふして間論注とかゝ
三巻　天地初發の段 一丁オ　神代七世の段 三十三丁
四巻　なのごろ島の段 一丁　みとのまぐりひの段 十四丁
五巻　大八島成出の段 一丁　諸神等生坐の段 三十丁
伊邪那美命御石隠の段 五十丁　迦具土神被殺の段 六十九丁
六巻　夜見の段 一丁　御身滌の段 三十七丁
七巻　三柱貴御子御事依の段 一丁　須佐之男命御嘯いさちの段 十五丁
御宇氣比の段 二十九丁　男御子女御子御詔別の段 三十八丁
八巻　須佐之男命御荒備の段 一丁　天石屋戸の段 十七丁
九巻　須佐之男命御被避の段 一丁　心俣とろちの段 十三丁
須賀宮の段 三十八丁　大國主神御祖の段 四十九丁
十巻　稲羽素兎の段 一丁　手間山の段 十四丁　根堅洲國の段 四丁
十一巻　八千矛神御妻問の段 一丁　うきゆひの段 二十八丁
大國主神御木神等の段 五十六丁

十二巻　少名毘古那神の段 一丁　幸魂奇魂の段 十六丁
大年の神邪山戸神御子等の段 二十八丁　天若日子の段 十五丁
十三巻　國平御議の段 一丁
十四巻　大國主神國避の段　日向宮御鎮座の段 六十五丁
十五巻　御孫命御天降の段　猿田毘古神阿射加の段 八丁
十六巻　猿女君の段 一丁　木花佐久夜毘賣御子産の段 三十七丁
十七巻　御幸易の段 一丁　綿津見神誕の段　鵜羽産屋の段 九丁
火照命奉仕の段 五十三丁　鵜羽産屋の段 六十一丁
鵜草葺不合命御子等の段 八十九丁
十八巻　廿巻　白檮原宮の段 神武
十九巻　高岡宮の段 綏靖 一丁　浮穴宮の段 安寧 七丁
廿一巻　境岡宮の段 懿徳 七丁　掖上宮の段 孝昭 十七丁
秋津島宮の段 孝安 三十四丁　黒田宮の段 孝昊 三十八丁
廿二巻　境原宮の段 孝元 一丁　伊邪河宮の段 開化 四十二丁
廿三巻　水垣宮の段 崇神
廿四巻　廿五巻　玉垣宮の段 垂仁
廿六巻　廿七巻　廿八巻　日代宮の段 景行

廿九卷 日代宮の段 一丁　志賀宮の段 成勢 四十七丁
三十卷 三十一卷 訶志比宮の段 仲哀
三十二卷 三十三卷 明宮の段 應神　三十四卷
三十五卷 三十六卷 高津宮の段 仁德　三十七卷
三十八卷 若櫻宮の段 履中 一丁
三十九卷 遠飛鳥宮の段 允恭　多治比宮の段 反正 三十七丁
四十卷 穴穗宮の段 安康
四十一卷 四十二卷 朝倉宮の段 雄略
四十三卷 甕栗宮の段 清寧 一丁　近飛鳥宮の段 顯宗 四十八丁
廣高宮の段 仁賢 七十丁　列木宮の段 武烈 七十六丁
四十四卷 玉穗宮の段 繼體 一丁　金著宮の段 安閑 二十三丁
檜垣宮の段 宣化 廿六丁　師木島宮の段 欽明 三十四丁
他田宮の段 敏達 四十八丁　池邊宮の段 用明 六十丁
倉椅宮の段 崇峻 六十八丁　小治田宮の段 推古 七十丁

板元　尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎

萬葉集畧解　三十二卷　薄用摺　十卷

此萬葉集も上古雄畧天皇の御代あるより後て寧樂朝ふいたる迄上天子より下庶人ふ至まで長哥短哥雜躰何れも種々の哥を廣大ふ集たる所謂古躰の哥集の大成なるもの也○萬葉としも号たる加茂真淵翁の萬葉考に万を數ヤ荷田の大人踈かの數の多かる也葉を言ひにて哥といふ世の意なるふ依つれどもいろハ字を借しのえ也葉と哥ふよせぞバ何を集あるやも聞えじ○集たる人是も同書に高野の御時天孝謙皇橘諸兄の大臣撰たまへるやと世繼が物語ふ見回されや高野の御時より前聖武天皇の御代ふらんとおもふ事ある也諸兄の大臣の撰ぞちふも古へ〻ふく實ふざるけらし〻普通の說ふ孝謙天皇の勅を奉て撰たまへるさまと諸兄公薨逝の後に哥らもさあれを或も家持卿の增加あるとも〻ひ又諸兄公らハあらじやもいひ種々先達の說ありれど加茂翁も真の萬葉集といふも今ゆる二

十巻の内ふ六巻はうらざるよしをいひて上の如く諸兄公の撰ふ治定せらる○惣哥員の事八雲御抄に四千三百十五首袋草紙ふ四千三百十首やはり○加茂翁新に改めらるたる巻次一の巻二の巻とし今の十三の巻と三の巻とけぬしるもじ宮五を風きと大も宮に振古今のごとし今の十四の巻五の巻古き東哥と時代代寺四の巻ハ今の十二巻と結びたるなる体長うの哥ら十一十二上集かめたたるぬるじ六の巻ハ今の五の巻ハ山上憶良の巻十の巻ハ哥も聊古く集ぶるもの大夫の家の集今の七の巻を家の集と他しかるり此二巻をうさむやし誰ど一人の集めさるなり今の十五の巻ハ新羅の御使の哥と中臣宅守茅上の根子の贈和今の十六の巻ハ前後由縁ある哥ふて帳中ハ戯笑躰とのせさるる中に河村王大伴家持も入る家持家の集の中ふもやあらむ今の三巻四。六。八。九。十七。十八。十九。廿ハ家持の家の集ふる事さがらりゆゑふ加茂翁の考今めの巻と今の七を八の巻とし今の五の巻と九の巻とし今の八と十二とし今の四と十三と十五と十一の巻とし今の九と十の巻とし今の六と十五とし十四とし今の三と十四とし十七以下今と同じかくあれや此畧解にハ今の校の次ふるせるも年久しき事なれば姑今本のまゝついつるよし凡例ふ云へるい○此注解ハ万葉考同別記の説とよゝ加茂の翁の家ふつどひていけらひしを也ゝしして翁沒後ふも友達論じあうて考得をりと思ふひもと人々のいひ出ぜるに翁の考ともらされしと思ふとハあげつとも凡例ふい一ゝ又契沖法師東万呂の本居先生の説をうまさ彩録千蔭自己の新説もをくれらび○枕詞の注ハ冠辞考に申づりて畧しそれふ用ひふもをるも附録ふ注をるよし也○異校校合ふ用ひたるく

。古本を東丸の本えこら。人のもてる一本元層年集書校一本の合せつてれの活字本ゝ。伊勢。國。拾穂本季吟古の校本ゝ合るの日ゝ合るの外ふ。古葉。畧要集。官本代西記ふ校り合ふ。古葉畧類聚抄春日若宮神主の波先祖の江祐東丸翁の考卿本蔭上抄る加田世夏長の藤写こ。活字本一本の。伊勢。國。拾穂本季吟古の校本ゝ合るの外ふ。古葉。畧要集。官本代西記ふ校り合ふ。古葉畧類聚抄春日若宮神主の波先祖の江祐東丸翁の考卿本蔭上抄る加田世夏長の藤写こ。

又此畧解作者橘千蔭と聊けるし平春海源道朋源鄕弦の三人なりけるよし文と上補凡要例ハの○二十巻目巻

末ふ此万葉集畧解をべて三十巻寛政三年二月十日よりて筆を起して同八年八月十七日ふ稿成をさてあよそあらべ考へ正して同十二年正月十日まてふみづうら書畢ぬ橘千蔭とありて跋下も一筆ふて纔十年の間に大成せるもの也巻首ふ寛政三年三月廿五日自序ありて次ふ凡例ありて○此書畧解と題すれやも諸本と比校し訓を訂正たる事叮嚀反覆極て勤多るものふして諸注解の謬誤を改めたるもの初心の輩ふも會得し易く平假字もて取捨き言語つきに書綴るとはへやも野鄙なる事れく大簡ならば駁雜るらず仙覺の抄ハ古風ふして可て哥と解く ふ益ぬく圓珠菴の代匠記い精密ふ過て讀ふも暇入り其餘諸名家の注釋少からねや此ふ得れむ彼ふ失ひ此畧解のごく全備しさるそのを見ば

板元　尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎

三大考

鈴屋翁門人服部中庸著○天地國土の行りかた其生出たる初發より今の如成堅またるまでの趣を神代固有の傳ふ考さゞひ深く考得て後ふ新ふ十の図を設け委細に説明め古来の大疑を氷解したる前人未發の卓論ち後ふ平田篤胤翁の著さもたる霊神柱と云書も專此三大考ふ原きて述られつらむと覺ゆ抑三大とハ天地のもちら地にく泉とも明の三ふして佛書に地水火風を四大と称をる ふ准へたる号みるべけ の異ふして漢儒の旧説とハ表裏せを但後世に開ける西洋の測算ふよる如くれど是便自然にさるべ神代の傳のなかところ○神代ふハ天地泉相互ふ来往したるものれるを後ふて此三大魂魄るらでを通達なるとき更由なども此考を熟覧もむ露不審きを更なし○本居先生の跋ふさやを深く物よくかむ思る西の國々の人どりれふしへよをいまざえらむが へ出ざとし更としめづらうりも考へ出たるかもく

をしくも教此名ろうもかくてはと高天原も夜の食国をいぶかしきくまれくハうつびぬまゝと称せ
もて古事記傳十七の巻の次に附らる

神代正語　三冊

書名かみよのまさゝと訓なし○上代の文ハ上代の語もて語傳けれどそれ記せる書ハ皆漢文なれど文字
遣ひに拘らひて古言と失ひ古意と知ひ害多し古事記ハ文字の傍に片假字
古言を傳ふるを旨とせしもたもバ文字の傍に片假字
つけて皆古語に訓逐されつきど讀者を猶文字に目の
つきて訓のおろそかふみてぬべきをうきひ神代の巻
だに殘らば假字に書なしと門人横井千秋主おみじ心に
おもひみがら昭順経しを請きけきバ翁甚悦ひ寛政元年
おもひ發して此著述と
四月五日のかどにかき終られたるよし序文ぬと巻首
よも見えたる其躰裁ハ神代の巻と古事記と書紀とを
合せて文のおもふきいやしと異ならぬは古事記よ

てていさうのたがひとも二無別ハあげぞ同文の
異なるを別よりげて又をかくもあるとしろし古事記
よまれたる文を書紀と取て古語ふりへしてあげとの
二典よハかれさる文の異古書にみえをるとも一つ二
つのげらもたり神名地名をべて物名を文字にてをる
し一々訓注を附清濁のさゞり尤嚴重なるゆ○初學の輩
を先此正語をよみ口熟て古事記傳をもよむ時を學業
の本末あしく軽卒のうやまろぬうらんうし○遠江
人栗田土満序横井千秋主駿ある

出雲國造神壽後釋　二冊

往昔年々二月三月又正月十月を月ふらの頃出雲國造朝
廷ふ参て物献りて神壽といふことを奏ことと有其儀式
うてそめの文ふらばそのの神壽の詞を延喜式八巻祝
詞の部ふ載られて詞を調をいと古く他書ふなき神代
の傳も殘りいとしく尤でたき古文章なれバ加茂真淵

翁の祝詞考ハ深くめでそふとみこれを鑒やしてぞ祝詞をもじめ万の文をもかきつべけもとをろされてよ
ア世の人うりうやうの名文うるをを知そめ本居翁もいよ〳〵尊ぶれて此書の柱ふ古風の哥をもろ〳〵
されとア○後釋とも祝詞考の文と意あげ頭書とも〳〵さずうつし出し次ふ考の誤りを理ア自己発明の新説を微細ふ記さる○
寛政五年九月出雲國造俊秀主序うり同八年刻成

御遷幸長歌

折本一冊

天明八年正月晦日内裡炎上寛政二年新内裡造營成り
て十一月廿二日遷幸ましはは翁今年六十一歳都ふ上
ア御うつろひの大御よそひを見奉アよまれたる哥并
反哥二首なり御行列のミわアさま眼前ふ見るごとく
よみなしたる古風の長篇にして長哥よむ手本ふれ〻
まさるハ行らじ大舘高門御遷幸をえ拜まぬ田舍人の
たゆよとて木に彫し

三代調和歌類題

六冊

三代とハ古今集後撰集拾遺集れ三代ふて大うさ同じ
風調の哥ふア詞も調もはりぬ支ふく哥の意雄々しくも
やさしくもそべて花も実もそれてとこれを大空の
月ふ〻と〻一代々にくもらぬ詞の鏡ふもハ定家卿の詠
哥大概よを詞ハ三代集といづ色からびしハのたまひ
かきてたアさきバ此類題ハ此三代の作者の哥またよ
み人れたらもぬも三代の作者の哥ふてきハり
さず三代集くもとよりふて世々の勅撰古今六帖菅家
万葉哥仙家集夫木鈔るどよアぬき出しえらひ集め哥
小随て題を附もども原書の詞書ハ省ず四季恋雑に
類題して初学の手枝としるしこもハ三河の國吉田
の城ふる岩上氏の家ふ自登波子といふ哥よみ文かき
がえらみかて女ふハ家刀自登波子らしき支べ但しくそどても
そめたゆハ夏目甕麿定りか泳つる支としひあてせたる
て中山美石實相院の古道るどのよし文政四年六月う
れしる本居大平主の序文ふあア今や都も鄙も哥道盛

小行をて初学の見るべき為として類題のあまた出来き
ど大うさえらこ蹴よて哥数のこ多きも風躰のようら
ぬまと写誤などまじまてハ害ふこをなれ譬例ふもひ
かもず座右ふかきても益ある支なし抑哥も詞やさし
く心それやに品高くことよむものるとも人ふま
さらむし新奇との心好むときハ姿も詞も心ざまも異
様ふのみなマ行てこもハ邪路ふおちいるといふものみ
れなとちうくを此あらぬ支るき三代調とよみそらん
じて詠哥修行あるべきしもと三代調類題とのこある
を和哥のもじ入たるを見易らんとてのマざなり
巻尾ユ文政五年春松齋藤井高尚ぬし跋あ

江戸職人歌合　二冊

東北院職人哥合鶴岡放生會職人哥合などの風ふ倣ひ
江戸當世の職人とあつめをきらが七月十日浅草の観
音堂ふ通夜し月ゝ恋れ題もて哥よみさらを左右につ
ひ名主自ら哥ふ判者よりるマて勝負をつけたる

やうにつぐマふしたる戯筆ふて難陳もあり哥も例の
ごく俗談をまじへ名るが今の狂哥者流のえせ哥よも
あらを上手の口つきいちゞるく画も加へたるふそのの
さま見るゞをしいやゝ興深き哥合なるマ

一番左名主　右大屋　二番左儒者　右医者
三番左八卦見　右人相見　四番左いちご　右顔人
五番左青物賣　右魚賣　六番左虫賣　右笛賣
七番左馬方　右車引　八番左呉服屋　右ふるぎや
九番左女郎　右藝者　十番左夜鷹　右船鍋頭
十一番左獄多　右乞食　十二番左鳶者　右肥畑
十三番左猪牙舟こぎ　右四ッ手駕かき　十四番左覚兵衛獅子　右軽業
十五番左そばや　右湯屋　十六番左紙屋　右茶屋
十七番左酒屋　右餅屋　十八番左みそ賣　右ざる賣
十九番左華結　右経師　廿番左屋根葺　右左官
廿一番左畳刺　右石切　廿二番左水くゝり　右上菓子屋
廿三番左付木賣　右幕賣　廿四番左座頭　右山伏
廿五番左念佛宗　右題目宗

○石原正明弟嶋周文化五年五月十五日伊豫國ふてか

けるあとまさ正明の奥書ちゃ右江戸職人哥合は
文化二年七月十日浅草寺ふ於てこもりう磯部千貝聞
書をる所なて奠遂さるふ依て傳写と聽さる池南摺紳
藤原春季図してもて賜ふ珍重いと予以為巴屋
封をべきれ世も猶四山賊あて昭職人をして文化小渥
浴せしむ堯舜の民ふ勝きるものう重て弥重

玉勝間　附目録一巻　十五冊

是ハ本居翁の随筆ふして若年より讀書の度抄録あて
てやてすつべきふもからぬ吏を始事に觸て見聞けり
しこやの沙汰道にうれる教のこふもあらび花紅葉
ふよれる風流今昔都鄙つさへたる土俗の習何と定
まりたはてれく年頃筆のまふ書をさまもたるが
尋常の人れよしおやをたがひ古学者の為ふて
金よりし撰ふさき重宝となりぬ。尾張雅嘉云書體全く
随筆ふして古書とあ中ふも記録の類多しと
ぇぇ。文化九年正月植松有信跋ふ中ふ此ふこと

むのゝざらをつくろはずうきやり給へるハ今も吟づ
かから物らりたまふやうふて此巻をくるかへし見る
たびふ有信等をのうみ大人の御許ふさぶらひていい
きうせもしちして。。初若菜よりもひ草もひ同じ
の巻まで翁の彫下るを椿の十五丁以上も同じ
以下ハ翁没後他筆ふて清書を初編を寛政六年刊行の
ち三巻づ彫刻し目録一冊とそへて十五巻五度ふし
て成就をるよし孫本居萬ア呂目録の後ふ丈ケさる彼
目録を十四巻中の件ゝ丁附とくしくして見る人の
便宜とれ
。詞軒けそぐ後に為田ふ玉がつまはみておゝろを野の
べのをさびふと一ぢの巻の前ふ記てやうて書名とせら
一の巻　初若菜　六十条　二の巻　櫻の落葉　四十八条　三の巻　はちもれ　四十六条
四の巻　こすもの草　八十七条　五の巻　枯野のをぎ　四十七条　六の巻　かゝあ　六十七条
七の巻　ふぢなみ　六十七条　八の巻　萩の下葉　百十八条　九の巻　花乃雪　六十二条
十の巻　山菅　三十条　十一の巻　さゝをろ　七十一条　十二の巻　山ふき　八十五条
十三の巻　おすひ草　百二条　十四の巻　椿　九十二条　十五の巻　惣目録

發行書肆

江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　日本橋通二丁目　須原屋新兵衛
同　淺草茅町二丁目　須原屋伊八
同　両國横山町三丁目　和泉屋金右衛門
大坂心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　心齋橋通安土町　河内屋和助
同　心齋橋通博勞町　河内屋茂兵衛
同　心齋橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門
京都二條通衣之棚角　風月庄左衛門
同　麩屋町通姉小路上ル　俵屋清兵衛
尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎